レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Current management of colorectal liver metastases	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移の最新治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 1 ）	
	Pubmed ID	11008255	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Surgical Oncology Clinics of North America	
	雑誌 ID		
	巻	9	
	号	4	
	ページ	853-876	
	ISSN ナンバー	1055-3207 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Martin LW	Department of Surgery, University of California, San Francisco, California
	その他著者 1	Warren RS	
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	大腸癌肝転移の診断・治療の現況を知る
	データソース	引用文献７６．選択基準示されず
	研究の選択	選択基準示されず
	データ抽出	抽出基準示されず
	主な結果	大腸癌では同時性肝転移が 25%、異時性肝転移が 25%に起こり、切除可能な肝転移は 10~30%である。 肝切除後の５年生存率は 25～50%、手術死亡率は 0～5%、合併症発生率は 11～42%（13 論文を引用）。無治療例の生存期間は 6～12 ヵ月であり、肝切除以外には長期生存がえられる治療はなく、肝切除は安全で有効な療法であるといえる。
	結論	①肝転移の診断、②肝切除の適応基準、③切除不能例の治療、④肝転移治療の展望について概説した。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	ﾚﾋﾞｭｰﾜｰ氏名	固武健二郎
	ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	2000 年に発表された大腸癌肝転移の総説論文。肝転移の診断から治療までが教科書的に記述されている。大腸癌治療の現況を概観するのに参考となる論文である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Colorectal metastasis (liver and lung)	
	論文の日本語タイトル	大腸癌の転移（肝と肺）	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 1 ）	
	Pubmed ID	12507210	
	医中誌 ID		
	雑誌名	The Surgical Clinics of North America	
	雑誌 ID		
	巻	82	
	号	5	
	ページ	1075-1090	
	ISSN ナンバー	0039-6109 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Penna C	Div. of Digestive and Oncologic Surgery, Ambroise Pare Hospital and University of Paris V, France
	その他著者 1	Nordlinger B	
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の6項目	目的	大腸癌の肝・肺転移の外科治療を概説する
	データソース	引用文献 49 選択基準示されず
	研究の選択	選択基準示されず
	データ抽出	抽出基準示されず
	主な結果	肝転移切除後の 3 年生存率は 40%、5 年生存率は 25%。報告されている 5 年生存率は 25%から 38%の範囲（引用文献 10 編）。予後因子は原発巣の進行度、同時・異時の別、病変の大きさと数、血清 CEA などである。肺転移切除後の 5 年生存率は 22%から 44%の範囲（引用文献数 4 編）。予後因子は肝転移と類似していた。
	結論	肝・肺転移の外科治療の現況を概説。門脈塞栓術、凍結療法・RFA による ablation、術前化療などの新しい療法が肝切除率を向上しひいては生存率を向上する可能性がある。
	備考	肝転移の自然史、手術適応、切除術式、および肺転移の手術適応、手術方法、治療成績についても概説されている。
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	ﾚﾋﾞｭｰﾜｰ氏名	固武健二郎
	ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	日本の論文の引用数は少ない。主に欧米における肝・肺転移の外科治療成績が網羅的かつ簡潔に概説されている。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical resection of colorectal carcinoma metastases to the liver	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移の外科的切除	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 2 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	8608500	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	77	
	号	7	
	ページ	1254-1262	
	ISSN ナンバー	0008-543X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Apr 1996	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nordlinger B	Centre de Chirurgie Digestive, Hopital Saint Antoine, Paris
	その他著者 1	Guiguet M	INSERM U263, Hopital Saint Antoine, Paris
	その他著者 2	Vaillant JC	Centre de Chirurgie Digestive, Hopital Saint Antoine, Paris
	その他著者 3	Balladur P	
	その他著者 4	Boudjema K	Service de Chirurgie Generale et Endocrinienne Hopital de Hautepierre, Strasbourg
	その他著者 5	Bachellier P	
	その他著者 6	Jaeck D	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移切除の適応決定のための scoring system を作成する	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の予後因子を調査	
	セッティング	多施設共同研究（Association de Francaise de Chirurgie）85 施設	
	対象者	1968～1990 年に大腸癌肝転移の治癒的切除を受けた 1568 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	無再発生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	手術死亡率は 2.3%。平均追跡期間 19 ヵ月で 5 年生存率は 28%、5 年無再発生存率は 15%。Cox モデルの解析で、年齢、初発癌の漿膜浸潤、初発癌のリンパ節転移、無再発期間、転移巣最大径、転移個数、切除断端（1cm 未満と 1cm 以上）が独立した予後因子だった。これら 7 つの予後因子数が 0～2 個、3～4 個、5～7 個の症例のそれぞれの 2 年生存率は 79%、60%、43%だった。	
	結論	肝切除後の予後評価のための簡便な scoring system を提案した。	
	備考		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	園武健二郎
	レビューワーコメント	1500 例を超える多数例の検討だが、データ精度、施設間格差、時代推移によるバイアスなどの問題はある。1cm 未満の肝切除断端距離を予後不良因子としている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgery for colorectal liver metastases with hepatic lymph mode involvement: A systematic review.	
	論文の日本語タイトル	肝所属リンパ節転移陽性の大腸癌肝転移に対する外科治療：システマティックレビュー	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 1 ）	
	Pubmed ID	10971419	
	医中誌 ID		
	雑誌名	The British Journal of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	87	
	号	9	
	ページ	1142-1155	
	ISSN ナンバー	0007-1323(Print) 1365-2168(Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Sept 2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rodgers MS	Department of Surgery, University of Auckland, Auckland
	その他著者 1	McCall JL	
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の6項目	目的	肝所属リンパ節転移陽性の肝転移に対する肝切除の意義を検証
	データソース	引用文献数 197。
	研究の選択	肝所属リンパ節転移陽性の肝転移に肝切除が行われた 145 例（15 文献）
	データ抽出	1964 年～1999 年。Medline, Embase and Cancerlist database; Search term=hepatic resection or liver resection, and colorectal or colon or rectal, and metastasis or metastases
	主な結果	肝所属リンパ節陽性の切除例の 5 年生存者は 145 例中 5 例。1 例は無再発生存、2 例は担癌生存、2 例の担癌状態は不明。5 年生存者の 4 例に系統郭清が施行されており、系統郭清された 84 例の 5 年生存率は 5%。
	結論	肝所属リンパ節転移例に対して系統的郭清を行っても予後は不良。肝所属リンパ節転移はほかの肝外転移形式と同じである。
	備考	Systematic review した 185 論文の肝転移切除例の 5 年生存率は 20～51%。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	集積された症例数は少ないが、肝門部リンパ節転移例の予後はきわめて不良であることが示されている。ただし、予防的な肝門部郭清の意義は未解決の問題である。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Therapeutic results for hepatic metastasis of colorectal cancer with special reference to effectiveness of hepatectomy.	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移の治療成績：とくに肝切除の有効性	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	14530655	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Disease of the colon and rectum	
	雑誌 ID		
	巻	46	
	号	10 Suppl.	
	ページ	S22-S31	
	ISSN ナンバー	0012-3706 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kato T	Department of Gastroenterological Surgery, Aichi Cancer Center, Nagoya
	その他著者 1	Yasui K	
	その他著者 2	Hirai T	
	その他著者 3	Kanemitsu Y	
	その他著者 4	Mori T	Department of Surgery, Tokyo Metropolitan Komagome Hospital, Tokyo
	その他著者 5	Sugihara K	Department of Digestive Surgery I, Tokyo Medical and Dental University, Tokyo
	その他著者 6	Mochizuki H	Department of Surgery I, National Defense Medical College, Tokorozawa
	その他著者 7	Yamamoto J	Department of Surgery, Cancer Institute Hospital, Tokyo
	その他著者 8		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移の治療成績と予後因子を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移患者（切除・非切除例）の臨床病理学的因子と予後を調査	
	セッティング	厚労省がん助成金による研究班の 18 施設	
	対象者	1992～96 年に治療を受けた大腸癌肝転移 763 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	肝切除 585 例の 5 生率は 39.2%で非切除 178 例の 3.4%よりも有意に高率。肝切除後の再発部位は残肝が 41.4%で最多。	
	結論	切除可能な肝転移に対しては肝切除を選択すべきである。	
	備考	肝切除後の予後因子：多変量解析から 5 因子が独立した予後因子であった（①術後 CA19-9、②術後 CEA、③肝外転移、④切除断端距離、⑤転移時期）	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎	
	レビューワーコメント	多施設共同研究による多数例の検討から、肝転移切除例の治癒率（5 年生存率）が約 40%に及び、切除可能な肝転移に対する肝切除が gold standard であることが示された。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Pattern of recurrence in liver resection for colorectal secondaries	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移切除の再発形式	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	3630198	
	医中誌 ID		
	雑誌名	World Journal of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	11	
	号	4	
	ページ	541-547	
	ISSN ナンバー	0364-2313 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Aug 1987	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ekberg H	Department of Surgery, Diagnostic Radiology, and Pathology, Lund University, and Southern Swedish Tumor Registry, Lund, Sweden
	その他著者 1	Tranberg KG	
	その他著者 2	Andersson R	
	その他著者 3	Lundstedt C	
	その他著者 4	Hägerstrand I	
	その他著者 5	Ranstam J	
	その他著者 6	Bengmark S	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	大腸癌肝転移切除後の再発リスク要因を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の再発と予後を調査	
	セッティング	Lund University	
	対象者	1971～1984 年に肝転移切除を受けた 68 例。在院死亡例は除外。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	無再発生存、生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	再発率は 78%（53/68）。再発部位は肝、肺、腹腔（リンパ節と腹膜）が多く、すべての再発例はいずれかの再発形式を伴った。肝再発は 65%、肝単独再発は 28%。肝外再発は 50%、肝再発のない肝外再発は 9%。肝再発の主な危険因子は、4 個以上の肝転移巣、切除断端距離 10mm 以下、肝外病変。両葉転移（vs.片葉転移）、系統的切除（vs. 部分切除）、腫瘍容積も肝再発リスクを高めた。肝外再発の危険因子は、肝切除時の肝外再発の存在のみ。	
	結論	肝再発の予知因子は肝転移個数、切除断端、肝外病変である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	園武健二郎	
	レビューワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Interval hepatic resection of colorectal metastases improves patient selection.	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移の観察後の肝切除が患者選択を改善	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	11064085	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Archives of surgery	
	雑誌 ID		
	巻	135	
	号	4	
	ページ	473-480	
	ISSN ナンバー	0272-5533 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Apr 2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Lambert LA	Section of General Surgery, Dartmouth-Hitchcock Medical Center and Norris Cotton Cancer Center, Lebanon, NH
	その他著者 1	Colacchio TA	
	その他著者 2	Barth Jr RJ	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	肝転移の切除時期を遅らせることで不顕性肝転移を除外し、治療成績の向上に資するかを知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移の診断から治療までの期間を 3 ヵ月未満と 3 ヵ月以上の 2 群に分けて生存率を比較（retrospective study）。	
	セッティング	Dartmouth-Hitchcock Medical Center	
	対象者	1985 年～1998 年に診断された大腸癌肝転移 318 例のうち切除可能な 73 例（同時性 36 例、異時性 37 例）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	同時性肝転移では、3 ヵ月未満で肝切除を行なった群と 3 ヵ月以上経過観察を行なった群の生存率に差はなかった。経過観察中、腫瘍増大のために非切除となったものはなかった。経過観察後に肝転移を切除した 10 例は他の 26 例よりも生存率が有意に高かった（p=0.2）。経過観察により 2/3 の切除不適例を除外することができた。異時性肝転移でも両群の生存率に差はなかったが、経過観察後の肝切除例と他の症例の予後に差はなく、経過観察が予後良好な患者選択に有用であることは証明されなかった。	
	結論	経過観察後の肝切除は生存率を損ねることなく、2/3 の肝転移例が肝切除を回避できた。同時性肝転移の経過観察は肝切除の患者選択に有用である。	

	備考	経過観察後に肝切除しえたのは同時性肝転移では 36%（10/28 例）に対して異時性肝転移では 71%（10/14 例）である。異時性肝転移では、経過観察例の無再発生存期間（19 ヵ月）が非経過観察例（26 ヵ月）よりも長い。これらの格差については考察されていない。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	Interval resection の意義を真に検証するには prospective study が必要である。不顕性肝転移の画像診断の精度向上も課題である。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Pathologic support for limited hepatectomy in the treatment of liver metastases from colorectal cancer	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移治療における肝部分切除の病理学的裏づけ	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での日次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	7826164	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Annals of surgery	
	雑誌 ID		
	巻	221	
	号	1	
	ページ	74-78	
	ISSN ナンバー	0003-4932 (Print) 1528-1140 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jan 1995	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Yamamoto J	Department of Surgery, National Cancer Center Hospital, Tokyo
	その他著者 1	Sugihara K	
	その他著者 2	Kosuge T	
	その他著者 3	Takayama T	
	その他著者 4	Shimada K	
	その他著者 5	Yamasaki S	
	その他著者 6	Sakamoto M	Pathology Division, National Cancer Center Research Institute, Tokyo
	その他著者 7	Hirohashi S	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移の至適な切除法を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移の局所進展様式を組織学的に検討	
	セッティング	国立がんセンター中央病院外科	
	対象者	1991 年からの 1 年間に肝切除を受けた大腸癌肝転移 40 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	転移巣の組織学的進展形式	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	40 例の 89 腫瘍を組織学的に検索。グリソン鞘進展は 22 例に陽性。腫瘍から 10mm までの肝実質内進展は 1 例のみ認めた。28 例(70%)に転移巣と肝実質の間に線維性組織(pseudo capsule)を認めた。	
	結論	肝転移巣は非連続的な肝内進展を示すことはまれで、非系統的肝切除の適応である。グリソン鞘進展に十分に配慮した切除が必要である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎	
	レビューワーコメント	大腸癌肝転移巣の進展形式が組織学的検討により示された。有用な知見だが、治療アウトカムが示されていないために、本研究のみから部分切除の系統切除に対する非劣性を結論することはできない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical margin in hepatic resection for colorectal metastasis: A critical and improvable determinant of outcome	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移の切除断端：重要で改善できる治療成績の決定因子	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9563547	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Annals of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	227	
	号	4	
	ページ	566-571	
	ISSN ナンバー	0003-4932 (Print) 1528-1140 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1998 Apr	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Cady B	Department of Surgery, Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, Massachusetts
	その他著者 1	Jenkins RL	
	その他著者 2	Steele, Jr GD	
	その他著者 3	Lewis WD	
	その他著者 4	Stone MD	
	その他著者 5	McDermott WV	
	その他著者 6	Jessup JM	
	その他著者 7	Bothe A	
	その他著者 8	Lalor P	
	その他著者 9	Lovett EJ	
	その他著者 10	Lavin P Linehan DC	

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移の再発形式と予後因子を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の臨床病理学的因子と予後の関係を調査	
	セッティング	Beth Israel Deaconess Medical Center	
	対象者	治癒的肝切除を受けた大腸癌肝転移 244 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	無再発生存をエンドポイントとして評価すると、肝切除断端、肝転移個数、血清 CEA が有意な予後因子。転移個数 2 個以下、切除断端距離が 1cm 以上、術前 CEA が低値な症例の 5 年無再発生存率は 30%以上。手術手技の要因である切除断端は再発形式と関連する	
	結論	上記の腫瘍因子が根治性を決定し、切除断端が再発形式と治療成績を左右する。患者選択基準と切除断端距離を適切に保つことで治療成績は改善する。	
	備考	切除断端陽性、断端距離 1cm 未満、1cm 以上の 3 群間比較で DFS に有意差がある（log-rank p=0.0001）。	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	園武健二郎	
	レビューワーコメント	1cm 以上の切除断端距離が必要なことを示した報告である。ただし、断端陽性例の肝再発率は 70%以上と高率だが、1cm 未満と 1cm 以上では肝再発率（24%vs.21%）、肝外転移を伴う肝再発率(44% vs. 46%)ともに有意差はない。DFS も 1cm 以上の群が良好であること	

		が図示されているが、1cm 未満の群との有意差検定がされておらず、上記結論を導き出すには問題がある。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Resection of the liver for colorectal carcinoma metastases: A multi-institutional study of pattern of recurrence	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移切除：再発形式の多施設研究	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	3526605	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	100	
	号	2	
	ページ	278-284	
	ISSN ナンバー	0039-6060 (Print) 1532-7361 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Aug 1986	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Hughes KS	National Cancer Institute, Bethesda, Md. The Registry of Hepatic Metastases collected data from 24 institutions
	その他著者 1	Simon R	
	その他著者 2	Songhorabodi S	
	その他著者 3	Adson MA	Mayo Clinic, Rochester, Minn.
	その他著者 4	Ilstrup DM	
	その他著者 5	Fortner JG	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York, NY
	その他著者 6	Maclean BJ	
	その他著者 7	Foster JH	University of Connecticut, Farmington, Conn.
	その他著者 8	Daly JM	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York, NY
	その他著者 9	Fitzherbert D	
	その他著者 10	Sugarbaker PH and other 37 coauthors	National Cancer Institute, Bethesda, Md. The Registry of Hepatic Metastases collected data from 24 institutions

一次研究の 8 項目			
	目的	大腸癌肝転移切除後の再発形式を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の臨床病理学的因子と予後を調査	
	セッティング	欧米の 24 医療機関（米国 18、英国 4、カナダ 1、ドイツ 1）	
	対象者	1948～1984 年に大腸癌肝転移の治癒的切除を受けた 607 例。手術死亡例は除外。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	607 例の 5 年生存率は 33%。5 年無再発生存率は 25%。70%(424 例)に再発が確認。初回再発部位は肝（35%）、肺（18%）が多い。初回再発以外の再発を含めても肝（43%）、肺(31%)が多い。多変量解析から肝再発危険因子は、切除断端（陽性 vs.陰性+不明:p<0.01）と転移分布(片葉 vs.両葉:p<0.01)の 2 因子だった。	
	結論	大腸癌肝転移切除は有効で、57%で肝がコントロールされた。切除断端陽性と両葉転移は肝再発高危険因子。高危険群に対する補助療法が必要。	
	備考	肝再発率は組織学的切除断端陽性 37 例は 68%、陰性または不明 570 例は 41%（p<0.001）。	

レビューワーコメント		
	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	切除断端に癌が露出している症例で肝再発率が高いことを示しているが、切除断端距離は検討されていない。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Genetic and histological assessment of surgical margins in resected liver metastases from colorectal carcinoma	
	論文の日本語タイトル	大腸癌の切除肝転移における外科的切除断端の遺伝子学的・組織学的評価	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	12093342	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Archives of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	137	
	号	7	
	ページ	833-840	
	ISSN ナンバー	0272-5533 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jul 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kokudo N	Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery Div. Dept. of Surgery, University of Tokyo and Dept. of Surgery, Cancer Institute Hospital, Tokyo
	その他著者 1	Miki Y	Dept. of Human Genome Analysis, Cancer Chemotherapy Center, Tokyo
	その他著者 2	Sugai S	
	その他著者 3	Yanagisawa A	Dept. of Pathology, Cancer Institute, Tokyo
	その他著者 4	Kato Y	
	その他著者 5	Sakamoto Y	Dept. of Surgery, Cancer Institute Hospital, Tokyo
	その他著者 6	Yamamoto J	
	その他著者 7	Yamaguchi T	
	その他著者 8	Muto T	
	その他著者 9	Makuuchi M	Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery Div. Dept. of Surgery, University of Tokyo

一次研究の８項目	目的	大腸癌肝転移の至適な切除断端距離を知る
	研究デザイン	肝転移巣周囲への進展を組織学的および分子生物学的に検討
	セッティング	癌研病院外科
	対象者	1996年～2000年に肝切除を受けた大腸癌肝転移58例（prospective study)。1980 年～2000 年に肝切除を受けた大腸癌肝転移 194 例（retrospective study)。
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）
	介入（要因曝露）	肝切除

ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
2	無再発生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
3	肝転移巣周囲の微小転移	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
4	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
6		1.主要 2.副次 3.その他（　）
7		1.主要 2.副次 3.その他（　）
8		1.主要 2.副次 3.その他（　）
9		1.主要 2.副次 3.その他（　）
10		1.主要 2.副次 3.その他（　）

一次研究の８項目	主な結果	肝転移の腫瘍細胞に K-ras または p 53 に変異のある 39 例から得られた 199 の肝切除標本で、転移周辺の肝実質に分子マーカーで確認された微小転移が認められたのは 2%。微小転移は転移巣から 4mm 以内に存在。グリソン鞘への微小転移は 14.3%に認められたが、転移巣からは 5mm 以内だった。Retrospective な検討で、肝断端再発率は断端距離が 2mm 未満は 13.3%、2-4mm は 2.8%、5mm 以上は 0%。肝断端再発のみの 15 例中 9 例に再肝切除を行い、5 年生存率は 53.6%であった。多変量解析から 6 つの独立した予後因子が選択された（腫瘍径、初発部位、同時・異時の別、転移個数、肝外転移、片葉・両葉の別)。切除断端は有意な予後因子でなかった。
	結論	肝転移巣の微小転移は転移巣の直近に局在し、肝転移の周辺に存在することはまれ。切除断端距離の必要最小長は 2mm で、その断端再発リスクは 6%であった。

	備考	断端陽性例は対象から除外されている。切除断端距離 1cm 以上の 49 例と 1cm 未満の 134 例は生存率に有意差はないが、無再発生存率では前者が高い傾向がある（P=0.054）
レビューワーコメント	レビューワー氏名	国武健二郎
	レビューワーコメント	分子マーカーと組織学的検索から大腸癌肝転移の micro-satellite は肝実質内では 4mm、グリソン鞘でも 5mm 以内にとどまること、自験例の retrospective な検討から切除断端距離は生存率に関連しないことが示されている。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Results of 136 curative hepatectomies with a safety margin of less than 10 mm for colorectal metastases	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移に対する安全切除断端10mm未満の治癒的肝切除136例の成績	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
雑誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9808511	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Surgical Oncology	
	雑誌 ID		
	巻	69	
	号	2	
	ページ	88-93	
	ISSN ナンバー	0022-4790 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Elias D	Dept. of Oncologic Surgery, Institut Gustave Roussy, Comprehensive Cancer Centre, Villejuif, France
	その他著者 1	Cavalcanti A	
	その他著者 2	Sabourin J-C	Department of Pathology, ditto
	その他著者 3	Pignon J-P	Department of Medical Statistics, ditto
	その他著者 4	Ducreux M	Department of Medical Oncology, ditto
	その他著者 5	Lasser P	Department of Oncologic Surgery, ditto
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の8項目			
	目的	大腸癌肝転移の切除断端距離が予後に及ぼす影響を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の臨床病理学的因子を解析	
	セッティング	Institut Gustave Roussy, Comprehensive Cancer Center, France	
	対象者	1984 年から 1996 年に治癒的肝切除を受けた大腸癌肝転移 196 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	無再発生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	切除断端距離 9mm 以下の 136 例の 5 年生存率は 27.8%、5 年 DFS は 22.9%。断端距離 0mm、1-2mm、3-9mm の 3 群間の生存率に有意差はなかった。9mm 以下（136 例）と 10mm 以上（60 例）の比較では、後者の生存率が有意に高率だが、前者は転移個数が有意に多い。	
	結論	切除断端距離は予後に影響するが、距離が短くても一定の治癒率が得られる。安全に組織学的完全切除が行える肝転移は切除すべき。1cm 以上の断端距離の確保に固執する必要はない。	
	備考	多変量解析から、R0、R1·2 切除ともに「切除断端距離 9mm 以下」は死亡リスクに有意に影響することが示されている。R0 切除で死亡リスクに有意に作用したのは、肝転移巣の占有割合（RR＝1.6）、切除断端距離（RR=1.93）、開腹所見による肝外病変(RR=1.47)の 3 因子だった。	

レビューワーコメント		
	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	切除断端距離は multi-factorial に規定される。多発転移、肝門部や肝静脈本幹に近接する病変では断端距離を十分に確保することが困難な場合が多い。「1cm 以上の断端距離」を肝切除の適応基準とすると、少なからぬ救命可能例を失うことになる。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Significance of lymph node involvement at the hepatic hilum in the resection of colorectal liver metastases	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肝転移における肝門部リンパ節転移の重要性	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9278645	
	医中誌 ID		
	雑誌名	The British Journal of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	84	
	号	8	
	ページ	1081-1084	
	ISSN ナンバー	0007-1323 (Print) 1365-2168 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Aug 1997	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Beckurts KTE	Dept. of Surgery, Technische Universitat München, München
	その他著者 1		
	その他著者 2	Hölscher AH	Dept. of Visceral and Vascular Surgery, University of Cologne, Koln
	その他著者 3	Thorban ST	Dept. of Surgery, Technische Universitat München, München
	その他著者 4	Bollschweiler E	Dept. of Surgery, Technische Universitat München, München
	その他著者 5	Siewert JR	Dept. of Visceral and Vascular Surgery, University of Cologne, Koln
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移切除例の肝十二指腸靭帯リンパ節転移の頻度と予後を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移の完全切除例(R0)の予後因子を多変量解析で解析する	
	セッティング	特定されず	
	対象者	1987 年から 1994 年までに肝転移の完全切除を受けた大腸癌肝転移 126 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除、肝所属リンパ節郭清	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	リンパ節転移	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	126 例に肝十二指腸靭帯リンパ節の郭清が行われ、94%が R0 切除、肝十二指腸靭帯リンパ節転移率は 28%(35/126 例)。R0 切除例の多変量解析では、肝十二指腸靭帯リンパ節転移と転移時期（同時・異時）の 2 因子が独立した予後因子。肝十二指腸靭帯リンパ節転移陽性例の 3 年生存率は 3%、5 年生存率は 0%、転移陰性例は 48%、22%。	
	結論	R0 肝切除後の最も重要な予後因子は肝十二指腸靭帯リンパ節転移である。	
	備考	肝所属リンパ節転移頻度は 3%から 28%までさまざまに報告されている。本邦の Nakamura らが 40%の高い 5 年生存率を報告しているが、他には 5 年生存例はない。	

レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	組織学的に肝所属リンパ節転移を検索した報告におけるリンパ節転移率は概して高い（14%～28%）。一方、肝切除後の再発部位は肝・肺が圧倒的に多く、肝所属リンパ節再発を経験することは多くない。両者の乖離の原因は不明であるが、肝所属リンパ節転移例の長期生存例がきわめて少ないことは確実である。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Resection of hepatic metastases of colorectal carcinoma: 20 years' experience	
	論文の日本語タイトル	大腸癌の肝転移切除：20 年の経験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	10436233	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Hepatobiliary Pancreatic Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	6	
	号	1	
	ページ	16-22	
	ISSN ナンバー	0944-1166 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nakamura S	Second Department of Surgery, Hamamatsu University School of Medicine, Hamamatsu
	その他著者 1	Suzuki S	
	その他著者 2	Konno H	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	大腸癌肝転移切除例の予後因子を知る	
	研究デザイン	肝転移巣例の臨床病理学的因子と生存率を retrospective に検討	
	セッティング	浜松医科大学	
	対象者	1978 年～1998 年に肝切除を受けた大腸癌肝転移 78 例。41 例に肝所属リンパ節を郭清。肝再発 24 例に再肝切除。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除、肝所属リンパ節郭清	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	初回肝切除の死亡率は 2.5%、肝切除後の 5 年生存率は 49%、10 年生存率は 33%。再肝切除（repeat resection）後の 5 年生存率は 14%。16%（7/43 例）にリンパ節転移を認め、リンパ節転移陽性 2 例が 5 年生存。単変量解析で、肝転移個数、肝内分布、肝外病変が生存期間に影響した。	
	結論	選択された肝転移患者に対する再肝切除と肝所属リンパ節郭清は延命に有効。	
	備考		

レビューワーコメント		
	レビューワー氏名	園武健二郎
	レビューワーコメント	肝所属リンパ節転移陽性の長期生存例を報告している数少ない論文。著者らは 2003 年に 125 例を再解析し、初回肝切除時に肝所属リンパ節転移陽性の 7 例は 1.5 ヵ月から 68 ヵ月以内に死亡したとし、肝所属リンパ節転移例に手術適応はないと総括している（日本外科学会雑誌 2003;104: 701-706)。肝所属リンパ節転移は強い予後不良因子である。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌	
	タイプ	臨床専門雑誌	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Resection of both hepatic and pulmonary metastases in patients with colorectal carcinoma	
	論文の日本語タイトル	大腸癌患者における肝肺転移巣切除	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	3 血行性転移の治療方針　1)肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	9740072	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	83	
	号	6	
	ページ	1086-1093	
	ISSN ナンバー	0008-543X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Sept 1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Murata S	Department of Surgery, National Cancer Center Hospital, Tokyo
	その他著者 1	Moriya Y	
	その他著者 2	Akasu T	
	その他著者 3	Fujita S	
	その他著者 4	Sugihara K	2nd Dept. of Surgery, Tokyo Medical and Dental University, Tokyo
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	大腸癌肝、肺転移に対する外科手術の意義について明らかにする。	
	研究デザイン	大腸癌肝、肺転移症例の手術後の予後	
	セッティング	国立がんセンター病院	
	対象者	大腸癌肝、肺転移 30 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	予後	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	生存期間の中央値は、肝肺転移巣切除後 30 ヶ月(7～108 ヶ月)、原発巣切除後 48.5 ヶ月(11～149 ヶ月)。肝肺転移巣切除後 1 年、3 年および 5 年生存率は、それぞれ 86.7%、49.3%、43.8%。手術中の死亡例なし。	
	結論	大腸癌肝肺転移に対する切除は、生存を延長させる一助となる可能性がある。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	亀岡信悟　小川真平	
	レビューワーコメント	大腸癌肝、肺転移に対する手術の有効性の有無を示している。一部の症例で生存延長に寄与する可能性が示されている。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌	
	タイプ	臨床専門雑誌	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Is resection of pulmonary and hepatic metastases warranted in patients with colorectal cancer?	
	論文の日本語タイトル	大腸癌患者における肝肺転移巣切除の正当性は？	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	3 血行性転移の治療方針 1)肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 7 ）	
	Pubmed ID	9869759	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	117	
	号	1	
	ページ	66-76	
	ISSN ナンバー	0022-5223	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jan 1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Robinson BJ	Dept. of Thoracic and Cardiovascular Surgery, The Cleveland Clinic Foundation, Cleveland
	その他著者 1	Rice TW	
	その他著者 2		
	その他著者 3	Strong SA	Dept. of Colorectal Surgery, ditto
	その他著者 4	Rybicki LA	Dept. of Biostatistics and Epidemiology, ditto
	その他著者 5	Blackstone EH	Dept. of Thoracic and Cardiovascular Surgery, ditto
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	肝肺転移巣切除の有効性の評価、転移の順序および時期の影響の調査、肝肺転移巣切除で治療効果が期待できる患者の選別	
	研究デザイン	大腸癌肝、肺転移症例の予後	
	セッティング	The Cleveland Clinic Foundation	
	対象者	大腸癌肝、肺転移 48 例(切除 23 例、非切除 25 例)	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	予後	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	生存期間中央値は、切除群(16ヶ月)が非切除群(6ヶ月)を上回っていた(P<0.001)。リスクパターンは、切除群で2年目にピークに達し、その後下降したが、非切除群では一定であった。切除群生存期間は、異時切除患者(中央値70ヶ月)が同時切除患者(中央値22ヶ月)または複合切除を受けた患者(中央値31ヶ月)を上回っていた(P<0.001)。死亡の危険因子は、高齢、多発肝転移、短期の無病期間。	
	結論	年齢が低く、孤立性異時性転移が肝臓、次に肺に見られ、無病期間が長い患者が、肝肺転移巣切除のベネフィットを得やすいと考えられる。危険因子を有している患者も、切除した方が切除しないよりも生存期間が長くなる。	
	備考		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	亀岡信悟 小川寛平
	レビューワーコメント	大腸癌肝、肺転移に対する手術の有効性の有無と治療効果が期待できる症例選別の検討が行われている。危険因子を有している患者も、切除した方が切除しないよるも生存期間が長くなることが示されている。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Multivariate analysis of a personal series of 247 consecutive patients with liver metastases from colorectal cancer 1. Treatment by hepatic resection	
	論文の日本語タイトル	自験247例の大腸癌肝転移の多変量解析. 1.肝切除治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	6703793	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Annals of Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	199	
	号	3	
	ページ	306-316	
	ISSN ナンバー	0003-4932 (Print) 1528-1140 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Mar 1984	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Fortner JG	Departments of Surgery and Medicine, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York, and Department of Medicine, Duke University Medical Center, Durham, North Carolina
	その他著者 1	Silva JS	
	その他著者 2	Golbey RB	
	その他著者 3	Cox EB	
	その他著者 4	Maclean BJ	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の8項目			
	目的	大腸癌肝転移の治療成績と予後因子を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の臨床病理学的因子と予後を調査	
	セッティング	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center	
	対象者	1971～1982年に大腸癌肝転移切除を受けた75例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	系統的切除65例、部分切除10例。肝切除率は30%（75/247例）。系統的切除59例の3年生存率は57%（手術死亡、在院死亡を除く）。肝転移のstage別3年生存率:stage Iが66%、stage IIが58%、stage IIIが0%（I：限局性、II：局所進展、III：リンパ節転移、肝外転移陽性）。前者の生存率は後2者より有意に高率。多変量解析では、肝転移のstageと初発癌のDukes stageが有意な予後因子。肝転移個数、初発癌の部位、年齢、性別、術前肝機能とCEAは予後に影響しなかった。	
	結論	転移の進展形式によるstagingが重要な予後因子である。	
	備考		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	国武健二郎
	レビューワーコメント	転移の進展形式が予後を左右し、肝外転移を伴う例（stage III）の予後はきわめて不良である。Stage II を規定する諸因子のなかで手術手技上問題となるのは肝切除断端とグリソン鞘への進展であろう。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Liver resection for colorectal metastases	
	論文の日本語タイトル	大腸癌転移の肝切除	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での日次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9060531	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Clinical Oncology	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	3	
	ページ	938-946	
	ISSN ナンバー	0732-183X (Print) 1527-7755 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Mar 1997	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Fong Y	Department of Surgery, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York
	その他著者 1	Cohen AM	
	その他著者 2	Fortner JG	
	その他著者 3	Enker WE	
	その他著者 4	Turnbull AD	
	その他著者 5	Coit DG	
	その他著者 6	Marrero AM	
	その他著者 7	Prasad M	
	その他著者 8	Blumgart LH	
	その他著者 9	Brennan MF	
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	大腸癌肝転移の有効性、安全性および予後因子を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除例の臨床病理学的因子と予後を解析	
	セッティング	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center	
	対象者	1985 年から 1991 年に肝切除を受けた大腸癌肝転移 456 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	無再発生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	456 例の手術死亡率 2.8%、合併症発生率 31%、5 年生存率 38%、MST46 ヵ月。多変量解析により独立した予後因子として選択されたのは、切除断端陽性、腫瘍径 10cm 以上、無再発期間 12 ヵ月以内、多発転移、肝外病変。しかし、無再発期間が短くても 5 年生存率は 24%以上だった。	
	結論	肝転移の絶対的禁忌は肝外病変だけである。肝切除は大腸癌肝転移の標準療法と見做すべき。	
	備考	切除断端距離 0.1-1cm（243 例）と 1cm 以上（113 例）の 5 年生存率はともに 43%で差がない。断端陽性（65 例）の 5 年生存率 17%とは有意差がある。肝外病変を有する 46 例の 5 年生存率は 13%。	

レビューワーコメント		
	レビューワー氏名	国武健二郎
	レビューワーコメント	本報告の 5 年生存率は、本邦の加藤らの多施設集計（585 例）とほぼ同等である。5 年生存率が 13%と低率なことから、肝外病変を絶対禁忌としているが、そのような進行例に対しても治癒が得られる唯一の治療法は肝切除である。化学療法の有効性が高まった現在、集学的療法の一環としての肝切除の意義を検討する余地は残されているであろう。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝肺転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical treatment of hepatic and pulmonary metastases from colorectal cancers	
	論文の日本語タイトル	大腸癌の肝肺転移に対する外科治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での日次名称	肝転移の治療方針、肺転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	9692467	
	医中誌 ID		
	雑誌名	The Annals of Thoracic Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	66	
	号	1	
	ページ	214-219	
	ISSN ナンバー	0003-4975 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jul 1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Regnard J-F	Department of Thoracic Surgery, Marie Lannelongue Hospital, and Department of Thoracic Surgery, Institut Mutualiste Montsouris, Paris, France
	その他著者 1	Grunenwald D	
	その他著者 2	Spaggiari L	
	その他著者 3	Girard P	
	その他著者 4	Elias D	
	その他著者 5	Ducreux M	
	その他著者 6	Baldeyrou P	
	その他著者 7	Levasseur P	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肝転移切除後の肺転移例に対する手術治療の有効性を知る	
	研究デザイン	大腸癌肝転移切除後の肺転移切除例の臨床病理学的因子と予後を retrospective に検討	
	セッティング	Marie Lannelongue Hospital, Institut Mutualiste Montsouris, (Paris)	
	対象者	1970 年～1995 年に大腸癌肺転移で肺切除を受けた 239 例のうち肝転移切除の既往がある 43 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肺切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	初発癌切除から肝切除までの中央値 12 ヵ月（0～108 ヵ月）、肝切除から肺切除までの中央値 18 ヵ月（1～72 ヵ月）。肝肺同時転移の 8 例は 1～6 ヵ月の間隔で切除。 50%生存期間（MST）19 ヵ月。5 年生存率は 11%（95%CI＝2-39%）で、肺単独転移切除例（196 例）と有意差なし。 単変量解析で、術前 CEA、肺転移個数、肝切除後の無再発期間が有意に予後に作用した。	
	結論	肝肺転移例でも手術療法が奏効する例がある。術前 CEA が正常で、無再発期間の長い患者が切除の良い適応。	
	備考		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	園武健二郎
	レビューワーコメント	肝転移切除後の肺再発という母集団における切除率は記載されていないが、肝転移切除後の肺転移でも外科治療により長期生存が得られる例があることを示す有用な報告である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Reappraisal of hepatic arterial infusion in the treatment of nonresectable liver metastases from colorectal cancer	
	論文の日本語タイトル	大腸癌の切除不能肝転移に対する肝動注療法の再評価	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	文献 88)	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (2)	
	Pubmed ID	8614003	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of the National Cancer Institute	
	雑誌 ID		
	巻	88	
	号	5	
	ページ	252-258	
	ISSN ナンバー	0027-8874	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	Mar 1996	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者		Meta-Analysis Group in Cancer
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	報告された大腸癌の切除不能肝転移に対する肝動注療法について再評価を行い、肝動注の臨床的意義を検討する。
	データソース	文献 88)
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	FUDR または 5FU を用いた肝動注療法の奏効率は 41%であった(CR 2%、PR 12%、オッズ比 0.25、95%信頼区間=0.16－0.40)。生存に関しては明確な結論は得られなかった
	結論	HAI が結腸直腸癌による肝転移患者に対し、全身化学療法より非常に高い腫瘍反応率を得ることができる。
	備考	
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	平島詳典 島田安博
	レビューワーコメント	肝動注療法の奏効率は動注群が静注群に比較して有意に高い反面、生存率に関しては肝動注単独では有意な予後向上が得られないとする報告が優勢である。今回の検討では、今までの報告を再検討した結果、予後の改善効果は確認できなかった。今後、肝動注の適応に関しては慎重な検討が必要と考えられる。直接効果の高い肝動注に、全身化学療法を併用することで予後延長を試みるなどの新しい試みが必要であろう。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肝転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Microwave coagulation therapy for multiple hepatic metastases from colorectal carcinoma	
	論文の日本語タイトル	大腸癌多発性肝転移のマイクロ波凝固療法	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 3 ）	
	Pubmed ID	10918156	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	89	
	号	2	
	ページ	276-284	
	ISSN ナンバー	0008-543X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Jul 2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shibata T	Department of Surgery, Toyonaka Municipal Hospital, Osaka
	その他著者 1	Niinobu T	
	その他著者 2	Ogata N	Department of Internal Medicine, Nagayoshi General Hospital, Osaka
	その他著者 3	Takami M	Department of Surgery, Toyonaka Municipal Hospital, Osaka
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌多発肝転移に対するマイクロ波凝固療法(MCT)の有効性を知る	
	研究デザイン	大腸癌多発肝転移に対する MCT と肝切除の有効性を比較	
	セッティング	Toyonaka Municipal Hospital	
	対象者	1990~1997 年に治療した大腸癌多発肝転移 68 例のうち本研究の適確基準を満たす 30 例を MCT14 例と肝切除 16 例に無作為に割り付けた	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肝切除、MCT	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶｳﾝﾄ）	エンドポイント	区分
	1	合併症	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	MCT と肝切除では合併症発生率に差はなかったが、MCT は術中出血量が有意に少なく、輸血例も有意に少なかった。 3 年生存率と 50%生存期間は MCT 群は 14%、27 ヵ月、肝切除群は 23%、25 ヵ月で有意差はなかった（P=0.83）	
	結論	MCT は肝切除と有効性は同等で侵襲は少ない。	
	備考		
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	園武健二郎	
	レビューワーコメント	本研究デザインから MCT の非劣性を結論付けることはできないが、少数例の検討ながら RCT よって検討されたことに意義がある。多数例による前向きな研究が必要である。	

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	転移性肝癌	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	なし	
	論文の日本語タイトル	転移性肝癌へのマイクロ波凝固療法の応用	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肝転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 13 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	2001028711	
	雑誌名	外科治療	
	雑誌 ID		
	巻	83	
	号	2	
	ページ	237-242	
	ISSN ナンバー	0433-2644	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	Aug 2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	別府　透	熊本大学医学部第２外科
	その他著者 1	松田貞士	
	その他著者 2	前田健晴	
	その他著者 3	高田　登	天草地域医療センター外科
	その他著者 4	山根隆明	熊本赤十字病院外科
	その他著者 5	石河隆敏	熊本大学医学部第２外科
	その他著者 6	広田昌彦	
	その他著者 7	島田信也	
	その他著者 8	江上　寛	
	その他著者 9	小川道雄	
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の６項目	目的	転移性肝癌に対するマイクロ波凝固療法(MCT)の有効性の評価
	データソース	引用文献２７．選択基準示されず
	研究の選択	選択基準示されず
	データ抽出	抽出基準示されず
	主な結果	大腸癌肝転移 40 例と大腸癌以外の肝転移 40 例の自験例の成績を中心とした総説。大腸癌肝転移に対する肝切除、MCT、化学療法の 5 年生存率はそれぞれ 41%、37%、5%であり、前２者と化学療法との間には有意差があり，MCT の 3 年生存率は 40～80%と報告されているが、生存例には担癌例が多く、長期成績は肝切除に劣る可能性が高い。
	結論	MCT のみでは完全寛解率は低く、肝動注療法の併用が必要である。ラジオ波凝固療法（Radio frequency ablation)との有効性の比較試験も課題である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	自験例の成績を中心とした総説である。主たる治療を肝切除、MCT、化学療法３群に分けて治療成績が比較されている。各群の転移個数は順に 1.8 個、2.5 個、5.8 個、H3 の割合は 6%、28%、42%であり、背景因子に差があるにもかかわらずMCTは肝切除と遜色のない生存率が得られている。RFA、冷凍療法を含めて、肝転移に対する local ablation の効果と限界について、さらに検討する必要がある。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肺転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical resection of pulmonary metastases from colorectal cancer: 10-year follow-up	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肺転移に対する外科切除. 10年の追跡調査	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での日次名称	肺転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	2776104	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	64	
	号	7	
	ページ	1418-1421	
	ISSN ナンバー	0008-543X (Print) 1097-0142 (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 1989	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Goya T	Div. of Thoracic Surgery, Dept. of Surgery, National Cancer Center Hospital, Tokyo
	その他著者 1	Miyazawa N	Div. of Thoracic Surgery, Tochigi Cancer Center, Tochigi
	その他著者 2	Kondo H	Div. of Thoracic Surgery, Dept. of Surgery, National Cancer Center Hospital, Tokyo
	その他著者 3	Tsuchiya R	
	その他著者 4	Naruke T	
	その他著者 5	Suemasu K	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	大腸癌肺転移に対する外科切除の有効性を知る	
	研究デザイン	大腸癌肺転移切除例を retrospective に検討	
	セッティング	National Cancer Center Hospital	
	対象者	1962~1987 年に大腸癌肺転移の切除を受けた 62 例（術死 3 例は除外）。5 例は同時または異時性肝転移に対して肝切除を施行。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肺切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	肺門・縦隔リンパ節転移率は 19%。59/62 例は完全切除。全 62 例の 5 年生存率は 42%、10 年生存率は 22%。50%生存率は 24 ヵ月。10 年無再発生存は 2 例。単発転移、腫瘍径 3cm 以下の予後が良好。初発癌切除後の無再発期間、肺所属リンパ節転移は肺切除後の生存に影響しない。	
	結論	肺転移切除により相応の 5 年生存率が得られるが、予後は腫瘍の増殖速度や length bias に左右される。ほかに有効な療法がない現在、積極的な肺切除が必要である。	
	備考		

ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	延命効果が確認された化学療法がない時代の症例を対象としており、手術療法を評価するのに適した論文である。42%の 5 年生存率は現在においても標準的である。5 年以降も原病によって生存率が低下することを示し、肺切除は腫瘍増殖速度が遅い症例が対象となっているという選択バイアスがあることを推論している。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	大腸癌肺転移	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Pulmonary resection for metastatic colorectal cancer: Experiences with 159 patients	
	論文の日本語タイトル	大腸癌肺転移切除：159 例の経験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	肺転移の治療方針	
書誌情報	研究デザイン	1.ﾚﾋﾞｭｰ 2.ﾒﾀｱﾅﾘｼｽ 3.ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 4.非ﾗﾝﾀﾞﾑ化比較試験 5.非比較試験 6.ｺｰﾎｰﾄ研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 （ 8 ）	
	Pubmed ID	8873711	
	医中誌 ID		
	雑誌名	The Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	112	
	号	4	
	ページ	867-874	
	ISSN ナンバー	0022-5223 (Print) 1097-658X (Electronic)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 1996	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Okumura S	The Division of Thoracic Surgery, National Cancer Center Hospital, Tokyo
	その他著者 1	Kondo H	
	その他著者 2	Tsuboi M	
	その他著者 3	Nakayama H	
	その他著者 4	Asamura H	
	その他著者 5	Tsuchiya R	
	その他著者 6	Naruke T	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	大腸癌肺転移に対する外科切除の有効性を知る	
	研究デザイン	大腸癌肺転移切除例の retrospective な検討	
	セッティング	National Cancer Center Hospital	
	対象者	1967~1995 年に大腸癌肺転移の切除を受けた 159 例。手術死亡 3 例は除外。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肺切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	生存	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	5 年生存率は 40.5%、10 年生存率は 27.7%。15 例（10%）が 10 年無再発生存。肝転移切除歴のある 39 例の 5 年生存率は 33%。局所再発切除歴のある 9 例は 25.0%。これらを除く 111 例の 5 年生存率は 44.9%で転移切除既往者とは有意差がある。 肝転移切除歴、肺転移個数（単発 VS 多発）、肺門部リンパ節転移が予後に影響した。肝転移切除歴なく、単発で肺門リンパ節転移がない 69 例の 5 年生存率は 62.1%、10 年生存率は 47.0%、他の 90 例の 5 年生存率はそれぞれ 22.4%、10.6%だった。	
	結論	肺切除は選択された症例の予後を改善する。肝転移切除歴がある例でも肺切除は予後を改善する。	
	備考		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	固武健二郎
	レビューワーコメント	1989 年の Goya らの集計を update したもので、肺転移に対する外科治療の State of the Art といえる成績である反面、外科単独療法の限界を示している可能性がある。